

マルグリット・ロンとドビュッシー

——その演奏「伝承」の成立過程を追って——

神保 夏子

フランスのピアニスト・ピアノ教育者のマルグリット・ロン Marguerite Long (1874-1966) は、最晩年のドビュッシーに教えを受ける機会を持ったことから、後年彼の伝統の継承者を名乗るようになる。しかし、彼女のいう「伝統」ないし「伝承」の内実やそれが形成されてきた過程については、従来の研究では明確にされてこなかった。本論文では、パリ・マーラー音楽資料館所蔵マルグリット・ロン・アーカイヴの資料調査に基づいて、ドビュッシーに関するロンの諸言説の変遷とその文脈を整理することにより、演奏家における大作曲家受容と、その「伝統」形成の様相の一端を解明することを目的とする。

公開講座や講演、雑誌への寄稿等に際して準備された様々な原稿からは、ロンがドビュッシーについて語る際、常に自らの過去の原稿を流用・再編集し続けていたことが分かる。教育者としての立場からドビュッシーを論じ始めた彼女は、ドビュッシーの演奏に必要とされる技術や心構えを伝えるため、特定のエピソードや格言を反復的に使用した。しかし、記念碑的作曲家としての彼の回顧に目が向けられるにつれ、彼女はドビュッシー論の中に「伝承者」としての自身の使命を暗示する物語を盛り込み始める。晩年の著書『ドビュッシーとピアノのもとで *Au piano avec Claude Debussy*』(1960) はこれら過去のドキュメントの集大成であり、そこに見られる論理の流れや文体の形跡を色濃く残している。

本研究からは以下の結論が導かれる。ロンが、ある種の逸話や教義に関してドビュッシーの死の直後から半世紀近く一定の同一性を保った「伝承」を行うことが出来たのは、その語りや過去の覚え書の絶え間ない筆写・編集作業に支えられていたからに他ならない。一方、その時々々の要請に合わせて新たな意味づけを付加されていったテキストの変遷からは、彼女が「現代音楽の伝道者」から「古典音楽の伝承者」へ、また一教育者から一時代を担う文化人へと変化していった様が窺えるのである。